

「杉の種を採って、完成木になるまでには100年の年月がかかる。見届けられないけれど、この種だったら100年経てば、あの山の木くらいにはなるなあ、と想像できるんです。100年先の森が見えるんですわ。そやから、使命感があるんやな」。11年前に出会った杉の種採り名人の言葉である。

2002年の秋、高校一年生だった私

緑のエッセー



この取組を通して、私は奈良県川上村で吉野杉の種を採り続けている名人に出会った。8尋ひつのロープの先に拍子木の付いた軽子かること呼ばれる道具一本で、70歳を過ぎた体が、高さ40mの杉に登り、2mの鎌を振るい、種を落とす。種は乾燥させ、大きさがとにふるいにかけて、最後はピンセットでごみを取り除き出荷。圧倒的な技と丁寧な仕事ぶりを目の当たりにし、その人が積み

や。人間だけやなしに、動物や植物が共存するための家や」。そう言われた名人の言葉がとても印象的だった。

あの出会いから11年が経ち、私は大学院を卒業。研究者としての道を歩みはじめている。専門は林業でもなければ、環境系でもない。アラブ・イスラームである。しかし、名人との交流は続き、日本の農山村の暮らしを地域の人たちに学ばせてもらって

●プロフィール
 高校一年の時、第一回聞き書き甲子園に参加。
 慶應義塾大学大学院修士課程卒業。
 現在、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
 研究所 上席所員(訪問)。25歳。

は、森の「聞き書き甲子園」という取り組みに参加した。これは、毎年100名の高校生が、樵きこりや炭焼き、漁師や海女さんなど、

重ねてきた人生を聞かせてもらい、山を基盤にした暮らしや生き方を未来に託そうとする姿に触れさせてもらった。

全国の名人・名手と呼ばれる方々を訪ね、
 一対一の対話を通して、自然と共に生きる知恵や技、ものの考え方や生き方を「聞き書き」する活動だ。今年はずでに、第11回「聞き書き甲子園」に参加する高校生の研修が8月に開かれている。

森林や林業に関して、興味も知識も乏しかった私は、木に赤身と白太があることを知らなかったし、環境問題の解決のために木は伐つてはいけないものだと思っていた。そんな私に、名人は森林のこと、林業のことを一つ一つ教えてくれた。「森は家

もきた。これからの暮らしを考える上で、その価値観と実践のヒントになるものは、あの時に出会った種採り名人の言葉と、彼が守り育て続けてきた山にあるのだと感じている。「森は大切」「地球環境を守ろう」と声高に叫ぶ運動や広告よりも、山と共に暮らす一人の名人に出会い、その人の人生に耳を傾けたこのことが、私と森林を繋ぐ糸になっている。